



筑紫女学園大学リポジット

名詞における単数と複数

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1173

名詞における単数と複数

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Singular and Plural Nouns in English

Takafumi OGATA

1. はじめに

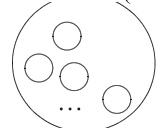
本稿ではカテゴリー分析を通して、英語の名詞の単数と複数进行を考察する。具体的には、名詞自体の単数と複数、それを受ける動詞が単数呼応なのか複数呼応なのか、またどのようなものと共に起るのかを考察していく。

結論から先回りしていえば、名詞の単数と複数は、単純に可算名詞と不可算名詞という2分類では説明することができず、5種類のタイプがあると主張する。このタイプをカテゴリースキーマで表記する。そして各々のタイプが持つ、特性をカテゴリースキーマを通して説明する。次に1つの名詞は、1つのタイプに限定されるのではなく、複数のタイプにまたがることもある。そこで名詞を12グループに分け、どのような名詞が、どのようなタイプをとるグループになるかを示していく。

2. 単数名詞と複数名詞のカテゴリースキーマ

2.1 カテゴリースキーマ

本稿では、カテゴリー分析を通して、名詞における単数と複数进行を考察する。そのためにまず、本稿でのカテゴリーの考え方から見ていく。カテゴリーは、入れ物としてのカテゴリー本体と、その中身としての成員からなる。本体には、ラベルが基本つけられる。(1) CATEGORY(α) 典型的には、(1)のようなカテゴリースキーマを持つが、実際にはカテゴリー本体の特質に応じて、カテゴリーや成員の在り方も大きく異なる。



ここでは単数と複数进行を考えるが、2つの観点からの考察が必要となる。一つめは、名詞自体が、単数か複数かという問題に加え、どのような修飾語と共に起るかがある。これは形態的な問題と、意味的な問題がある。形態的とは、単数形と複数形のどちらの形をとるかになり、意味的とは、形態とは関係なく、単数と複数のどちらの意味を持つかになる。これに伴い修飾語も決まる。

二つめは、一つめと連動するが、動詞が単数呼応になるのか、複数呼応になるのかという問題

がある。どちらをとるかは名詞そのものが持つ意味的なものと、形態的なものによる。それに加え、修飾語句を伴う名詞句表現の場合、どれを主要語と見るかということに左右される。しかしこれとて英語で統一されているとは限らず、アメリカ英語とイギリス英語など地域で異なることもあれば、英語の話し手による個人差で異なることもある。こうした問題の解決に近づくためには、カテゴリ分析が有用と考える。

2.2 5つのカテゴリタイプ

まず可算名詞と不可算名詞から見ていく。可算名詞は通例、1個であれば意味は単数で単数形、複数個であれば意味は複数で複数形になる。一方不可算名詞の場合、数で数えることはできず、形や境界線がない連続体と捉えられるので、単数扱いとなる。

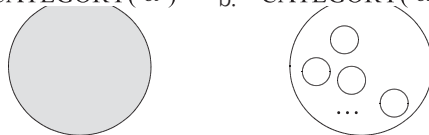
両者の違いは、カテゴリ分析では、成員の特質に帰因する。カテゴリの成員が個体成員かどうかによって左右される。個体成員とは、他成員と区別される形をもつもので、有意義な境界線を持つものを指す。現実世界で客観的に形があったとしても、それが意味ある形と見なされなければ、形を持たないことになる。例えば、riceは不可算名詞だが、よく見ると米粒には形があるし、他と区別される境界線がある。しかし認識上は形がない、連続する固まりと見なされるため、個体成員と見なされない。つまり個体成員かどうかの判断は、主観的要素に影響される。

一方不可算名詞には、個体成員は存在しない。成員は同質の特性／属性を共通とする。連続する固まり(連続体)と認識される。他成員と区別するための形や境界線は存在しない。よって個体成員が存在しない。成員はすべて同質な集合体となっている。可算名詞は(2)に示すように普通名詞や集合名詞、不可算名詞は(3)に示すように物質名詞、抽象名詞、固有名詞が代表的とされる。

(2) cat, dog, boy, girl, pen, chair, desk, student, teacher, family, class, team, club, etc.

(3) coffee, tea, rice, fruit, gold, silver, wood, peace, love, kindness, Japan, London, Christmas, etc.

これらを典型的なカテゴリースキーマで示す (4) a. CATEGORY(α) b. CATEGORY(α)
 したものが、(4)になる。(4a)が不可算名詞のスキーマ、(4b)が可算名詞のスキーマになる。



(4a)では個体成員(小丸で表記)が存在しない。均質に網掛けすることで、成員が同質で、成員の形や境界線がないことを表現している。ただこの網掛けには、もう一つの意味がある。それは背景化である。種々の違いを背景化することで、同質と見なしている。例えば先ほどのriceは実際は、お米の一粒一粒が個別に存在しており、その形、大きさには違いがある。日本語では数えることができる。そうした差違を背景化し、連続体として認識することで、不可算名詞として扱われている。

一方(4b)では、成員は個体成員となっている。成員の数は複数だがほとんどだが、1個だけの場合もある。この個体成員には、注意しなければならないことが二つある。一つは個体成員は必ずしも同じ種類とは限らず、同質の程度には、差がある。例えば(5)のfurnitureにはchair, table, bed, desk, cupboardなど形態や素材で違いが大きいし、clothesでもshirt, coat, trouser, dressなど多様性に富む。スキーマで示せば(6)になる。しかし認識では単なる個体成員の集まりで、こうした差違は捨象され、背景化される。そのためスキーマ上でも、(4b)のように同じ○で表記する。

(5) furniture, clothes, goods, supplies, greens, sprits, belongings, furnishings, arms, etc.

もう一つは成員自体がカテゴリー本体になる場合がある。つまり入れ子構造が可能である。(7)が具体例で、(8)がそれらのスキーマになる。

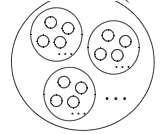
(7) class, team, club, committee, company, union, firm, etc.

例えば class では、class の中に複数の成員(生徒)が存在する。ここでも(6)と同様で、そうした差違を捨象している。よって同じ○で標記することとする。

(6) CATEGORY(α)



(8) CATEGORY(α)



次に動詞の呼応だが、不可算名詞(4a)は単数呼応、可算名詞(4b)では焦点があたるものが1個なら単数呼応、複数個なら複数呼応となるのが普通である。そのため一見、単数と複数の違いは、単に個体成員の数

だけで決まるかのように見える。しかしことはそう単純ではない。(4)に示す2分類では、単数、複数をはっきりとできない。実際はもっと複雑で、(9)~(12)のような例がある。(9)では、はさみは1本だが、刃が2枚ついていることから、scissors と複数形になっている。(10)では、people に複数のsが付加しないのは、人々の意味だからである。構成員が5人であると述べている。数詞が付いたとしても、成員を指すこともあり、名詞は複数形とならないことがある。

(9) I need a pair of scissors to cut this cloth. (10) That taxi only sits five people.

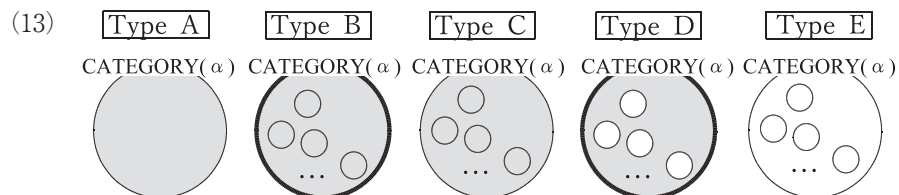
また動詞の呼応において、形と意味にずれが生じている場合がある。名詞が単数形であっても、複数呼応したり、名詞が複数形であっても、単数呼応する場合がある。(11a)では、the United States of America が複数個の集合体ゆえに複数形をとっているが、単数呼応になっている。(11b)では、複数の学生(2人以上)なのに単数呼応となっている。(11c)は、Jane と I で二人が主語なのに、複数呼応ではなく、単数呼応となっている。(12)は、集合名詞 family に対して、動詞が単数呼応になったり、複数呼応になったりする(アメリカ英語では単数呼応が好まれる)。

(11) a. The United States of America is considered a country of great potential.

b. More than one student has the same name in his class. c. Not only Jane but also I am to blame.

(12) a. My family is very large. b. Are your family all well? (安藤 2005: 386)

このようなことを、(4)のような可算名詞、不可算名詞の2分類で、英語の単数・複数と説明することが難しいことがわかる。本稿ではさらに細かく分類し、各々の名詞の単数と複数に関わる特性を示していきたい。具体的には、(13)に示す5種類のカテゴリースキーマを想定する。つまり Type A (= (4a)) と Type E (= (4b)) の間に、3種類の段階性を持ったスキーマを想定する。網掛けは背景化を、太字は焦点が当たっていることを示している。



これら5タイプは、(14)に示すように連続していると考え(14)える。連続は直線的ではなく、円環をなすと考える。円環とするのは、Type A と Type E が近い関係にあるからである。両方の用法を持つ名詞は多い。(15)は Type A⇒E、(16)は Type E⇒A に推移した例になる(例は安藤 2005: 390-392)。



- (15) a. Two coffees, please. b. He threw a stone at the dog. c. The party was a success.
 d. There was a silence. e. Her mother was a Johnson.
 f. There are two Greens in this class.
- (16) a. The pen is mightier than the sword. b. He succeeded to the crown.
 c. Mother is proud of you.

なお動詞の呼応では、Type E の単数用法から Type A, B までが単数呼応、Type C~Type E の複数用法までが、複数呼応を基本とする。各々の Type については、3 節で述べていく。

ここで注意しなければならないことがある。名詞として言語化される表現は、必ずしも成員とは限らず、カテゴリーラベルのこともある。何を対象として数えるかで、違いがある。言語表現として表れる名詞は、カテゴリーラベルに相当するのか、成員に相当するのかで 2 種類ある。

通常の普通名詞の場合、成員を数える。例えば、カテゴリー car であれば、ラベルも成員も同じ名称、car になる。成員 car の 1 つに焦点が当たれば、成員を単数として数え、複数の成員に焦点があたり前景化されれば、複数として数えられる。一方 the United States of America は固有名詞として機能しており、成員ではなく、カテゴリーラベルになる。成員はあるが、背景化されており、カテゴリーラベルに焦点があたり、言語表現として表れる。

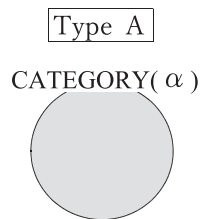
具体的に(13)の Type 別で述べれば、Type A~Type D までは、カテゴリーラベルが言語化される。一方 Type E だけが、成員が言語化される。どの部分が言語化されるかで、その名詞の単数・複数におけるふるまい及び意味が異なってくる。次節で、タイプ毎に割り当てられる名詞、ふるまいについて見ていくこととする。

3. 5 種類のカテゴリータイプ

(13)に示した 5 種類のカテゴリータイプを 1 つずつ見る。ここで確認したいことは、5 種類のカテゴリータイプは、別個に存在しているのではなく、連続すると考える((14)を参照)。また各名詞は、1 つのカテゴリータイプとは限らないことにある。複数のタイプにまたがることは、普通に起こる。これについては、グループ分けと称し、4 節で扱うこととする。

3.1 Type A

スキーマ(17)の Type A は、成員は区切りや境界がなく、個体成員 (17) が存在しない。もっぱら不可算名詞がとるタイプになる。不可算名詞には、物質名詞、抽象名詞、固有名詞があるとされる。しかし 5 種類にタイプ分けしたため、すべての物質名詞、抽象名詞、固有名詞が Type A になるわけではない。あくまで連続した集合体として認識されるものに限られる。現実世界で、客観的には形があり、個体の集合体になっている場合でも、そうした個体が認識されず、連続したものと認識される。



ここでは背景化が起こっている(灰色の網掛け表現)。ある特定の特質に限定することで、それ以外の特性を背景化し、すべて連続体として認識している。具体例として、(18) (19) などがある。

- (18) a. water, gold, butter, beer, cloth, chalk, love, peace, happiness, honesty, friendship, health, etc.
 b. sugar, rice, salt, hair, black pepper, etc.

- (19) news, measles, hives, shingles, mumps, rabies, etc. (久野・高見 2009: 20)

(18)は、物質名詞の例になる。個体成員がない(18a)と、客観的には個体の集まりだが、連続体

として認識される(18b)がある。(19)は、語源的に複数形だったものや病気名になる。元々は複数成員の集まりとみなされていたものもあるが、もはやその認識はなく、Type A に属する。

同様に固有名詞も Type A を基本とする。その成員は意識されない。しかしときに Type B になることもある。(20)では成員が意識されるため Type B となるが、数えられることはない。

(20) a. John has a sensitive side. b. Mary has a gentle side also.

ただし種類・個体・製品・事例などに意味が変われば Type E になることもある。ただ意味が違えば、タイプが異なってくるのは自然と考える。ここでは同じ意味での推移を中心に考える*1。

(21) a. You can capture from paper to digital. b. She wrote a paper on this subject.

動詞の呼応では、(22)に示すように単数呼応になる。Type A では個体成員がないからである。

(22) a. Water is normally plentiful during the rainy season. b. Honesty is the best policy.

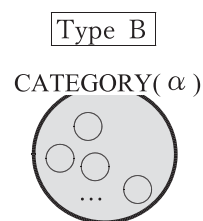
むろん Type A であっても、形あるもの(助数詞)にいれたり、境界線を認識すれば数えることができるし、それが複数個あれば、複数呼応になる。しかしそのときはタイプが異なってくる(Type D, E)。そのため Type A では、many ではなく、不定の量を表す much や little などが付加される。

(23) a. The cook was afraid of using too much salt. b. You have shown me so much friendship.

これら名詞は、成員が連続体として認識されるので、言語化されるのは、カテゴリーラベルになる。不可算名詞の中には、Type A のようにすべてが均質ではなく、成員がうっすら意識されるものがある。それらは、次の Type B になる。

3.2 Type B

スキーマ(24)の Type B は、Type A と違い、個体成員がうっすら (24) と認識される。認識はされるが、背景化されているため、個体成員自体が数えられることもなく、数という概念は適用されない。個体認識がうっすら認識されつつ、カテゴリー全体が、単一体としての集合体として機能する。そのためカテゴリー本体に焦点があたると見なす(太線で表記)。焦点があたること、全体が強調され、単一体であるカテゴリーラベルに焦点があたり、それが言語化される。



Type B の例として、(25)(26)(27)(28)がある。(25)は不可算名詞の一部、(26)は国名などの固有名詞、(27)はゲームの名前、(28)は学問名になる。学問名は語源的にはすべて複数形になる。

(25) furniture, cutlery, machinery, crockery, money, jewelry, baggage, luggage, etc.

(26) the United States of America, the Alps, the Hebrides, the Netherlands, the United Nations, etc.

(27) billiards, cards, checkers, darts, draughts, dominoes, fives, ninepins, skittles, tenpins, etc.

(28) acoustics, athletics, classics, economics, electronics, ethics, gymnastics, linguistics, mathematics, mechanics, phonetics, physics, politics, semantics, statistics, etc.

(Huddleston and Pullum 2002: 347)

(26) - (28)では背景化されているとはいえ、個体成員がうっすら認識されているため、複数形の形をとるが、動詞は単数呼応となる。ここには名詞の形態と動詞の呼応にずれがある。このずれはスキーマ(24)で示しているように、カテゴリー全体に焦点が当たるからである(太字で表記)。全体で単一体となっていることが強調され、単一体と認識されるため、動詞は単数呼応となる。

(29) a. Billiards is the king of all indoor games.

b. Economics is a coverall term for supply and demand.

また(25)に対しては、背景化を伴う単一の集合体ゆえ、many で修飾されることはなく、much が使われる。また数詞等を用いて、成員を数えることもできない。

(30) a. She doesn't know how much/*many furniture her husband bought.

b. He spent too much/*many money on his house, his wife, and his daughter.

(31) a. *There was three machineries such as rolling mills.

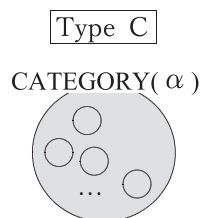
b. *He had three luggages and two horses.

なお元々 Type B だったものが、個体成員になり、数えられる場合がある。これは Type B でなく、Type E になる。例えば suite は一揃えということで、成員が意識されるが、集合体として存在する。これが個体成員扱いされ、Type E となり数えることができるし、many 等で修飾できる。

(32) The hotel facilities includes 30 rooms, two suites, restaurants, cafeteria, and garage.

3.3 Type C

スキーマ(33)の Type C は、Type B と比べ、カテゴリー本体に焦点 (33) が当たらない。よってカテゴリー全体が、単一体の集合体という含意はない。そのため成員に数的概念がより生じる。Type C は同じスキーマで、大きく I 類と II 類に分けられる。両者は、成員の見え方に若干程度差がある。



まず I 類であるが、(34) (35) のようなものがある (例は久野・高見 2009: 10-12)。(34) は異種の様々なものからなる集合体を表す名詞で、(35) は同種のものからなる集合体を表す名詞になる。

(34) dishes, refreshments, groceries, clothes, goods, leftovers, supplies, valuables, covers,

belongings, furnishings, spirits, greens, humanities, proceedings, arms, troops, surroundings, contents, etc.

(35) woods, grassroots, oats, plains, chives, etc.

構造的には Type E と同じだが、成員が背景化されている。そのため個体成員ではなく、カテゴリーラベルが名詞として言語化される。それでも成員がうっすら認識されることから、these/those に加え、many と共起できる。また much や数詞とは共起できない。

(36) a. There is no market for these/those goods in China.

b. He found that many/*much valuables have been left behind.

c. *There was insufficient space to store his nine belongings in her room.

(34) (35) の両者における振る舞いの違いはなく、どちらも複数形の形をとっているため、動詞は複数呼応となる ((37))。個体成員の認識が Type B よりやや強くなっているためである。

(37) a. Their clothes are conspicuous.

b. Refreshments are carried by attendants to private rooms.

しかし動詞の呼応および修飾語には、ゆれがある。clothes や oats などは、many も much もつけることができる。それに従い複数呼応になったり、単数呼応になったりする。

(38) a. How many clothes should you have? It's a question I get frequently from my image consulting clients. b. How much clothes does a normal teenager have? (久野・高見 2009: 16)

(39) a. How many oats are there in this biscuit?

b. I was just wondering how much oats you guys generally eat per day.

(久野・高見 2009: 16)

こうしたゆれは、タイプのゆれと考える。どのタイプに属すると認識するかの違いが、修飾語や動詞の呼応に影響を及ぼしている。動詞が単数呼応になったり much と共起するのは、Type A と認識しているからである。一方動詞が複数呼応になったり many と共起するのは、Type C と認識しているからと言える。後述するが、タイプ間の移動は、ごく普通に起こるし、タイプの認識も絶対ではなく、地域により、あるいは話し手個人により、ゆれが生じる。こうしたことは I 類のみで起こる。これは成員の見え方が I 類の方が、II 類より若干弱いため、揺れが生じると考える。

次に II 類では、成員の現れが I 類よりも強いため、Type A とのゆれはない。具体的には (40) (41) のような例がある。どちらも一体化した対称的部分からなる個体成員を持つ名詞になる。ただし (40) は一体化したものを切り離すと、もはやそれではなくなるもの、(41) は切り離し可能な対称的部分からなる個体成員を持つ名詞になる。(40a) が下半身をおおう衣類、(40b) が「ハサミ、ペンチ」などの道具、(40c) が視覚補助器具になる。

(40) a. pants, trousers, slacks, shorts, trunks, briefs, panties, tights, bloomers, jeans, overalls, etc.

b. scissors, pliers, tongs, shears, nutcrackers, tweezers, clippers, etc.

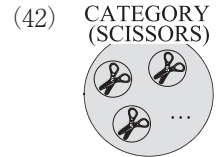
c. binoculars, glasses, spectacles, goggles, etc.

(久野・高見 2009: 2-3)

(41) shoes, boots, slippers, sandals, socks, etc.

(久野・高見 2009: 7)

両者を分けたのは、基本タイプは同じでも、4 節で述べるグループ分けのとき、異なるふるまいをするからである(後述)。これらは 1 つのものを指す場合であっても、複数形を用いる。例えば 1 個のはさみであっても、scissors となる。ここではカテゴリーラベルも、成員も同じ同じ名称が付く。Scissors で言えば、カテゴリーラベルも成員も同じく、scissors の名称がつく。成員一つ一つは、対称となるものがセットになって初めて scissors になることから、成員も名称は scissors となる。図示したものが (42) になる。このとき a scissor は存在しない。a scissor では、もはや scissors ではないからである。



ここでも成員部分が背景化されているため、成員は前面にでることはできない。よってカテゴリーラベルが、名詞として言語化される。つまり名詞が複数形になるのは、成員が複数部分からなるからではなく、カテゴリーラベル自体が複数形の名称になっているにすぎない。一方 (41) は Type C に加え、Type E の用法もある。(41) で言えば、a shoe, a boat, a slipper, a sandal, a sock が可能となる。このときカテゴリー名も成員名も単数表記になる(4 節で後述)。

この II 類でも、成員を数詞で直接数えることはできない。とはいえ Type B よりも成員が認識されているので同様に、these/those/many の類は付加することができる。

(43) a. *His two slacks are all wrinkled.

b. *The two tongs were placed on a heap of fried shrimp.

(44) a. I don't like the snipping noise of these scissors. b. I'd like to have those pants cleaned.

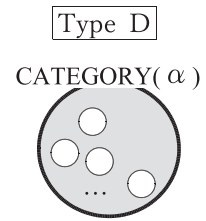
c. Does your wife need many spectacles?

動詞の呼応においては、形態が複数形になっていること、各成員が複数の対称物からなることから、動詞は複数呼応となる。

(45) a. The scissors were not sharp. b. The faded jeans are agreeable to any ones.

3.4 Type D

スキーマ(46)の Type D では、Type B, C よりさらに成員が見えるようになる。具体的には、成員が前景化される。前景化されるので、成員を数えることが可能となる。しかし(46)にあるように、カテゴリー全体に焦点があたるため(太字表記)、カテゴリーラベルが名詞として言語化される。よって名詞は、一つ一つの成員ではなく、あくまでカテゴリー全体の名称になる。Type D になるもので代表的なものに、2種類ある。



一つめは(47)のような、構成員が定まっていない、いわば仕切りのない集合体がこのに含まれる。なお people は国民、民族の意味では、Type E になる。

(47) *valuables, cattle, people (人々), geese, cows, police, clergy, aristocracy, nobility, peasantry, etc.*

久野・高見(2009: 69)では、集合名詞ではなく複数普通名詞と述べているが、これらはカテゴリーラベル自体が複数形になっている。数詞がつくときは、あくまで成員の数を数えるのみである。例えば(48)のように数詞を前につけることで、成員の数を示すことができる。

(48) *three valuables (3つの貴重品), four people (4人の人たち), three cattle (3頭の牛), etc.*

ここで注意しなければならないのは、*valuables* で言えば、*valuables* のかたまり(グループ)が3つあるという意味ではなく、*valuables* という一つのかたまりがあり、3つの成員で構成されているということを意味する。つまり *valuables* 自体を複数で数えることはできず、その成員を数えているにすぎない。そのため言語化された名詞は、あくまでカテゴリーラベルであって、成員の名称ではない。これをカテゴリー全体に焦点があたること(太線で表記)を、スキーマ(46)上で示している。

なお *valuables* 自体が、複数成員の集合を想定しているので、(49)のように成員が1個であれば不適格となる。

(49) a. *a/one valuable b. *a/one valuables

(50) *one of her valuables* (久野・高見 2009: 15)

このとき成員の数は複数と見なされるため、*many* や *these* などの表現とも共起できる。

(51) a. *He took many valuables away with him.* b. *These people consist of women and children.*

二つめの代表的な Type D は、不可算名詞に助数詞を付加し、数える場合の用法になる。助数詞により不可算名詞に形を与えるもので、形ができることで成員を数えることが可能となる。ただしこの用法は、他の単語(助数詞)を追加するので、純粹に名詞の用法とはいえないが、付加することで、名詞のタイプが変化する。本来は均質な集合体と見なしているものが数えられるのは、Type D に推移するからである。推移により、成員を数えることが可能となる。(52)に具体例を示す。

(52) *a glass of water/milk, a cup of coffee/tea, a bottle of wine, a spoonful of salt, a sheet of paper, three pieces of furniture*2, a loaf of bread, a pair of shoes, etc.*

何らかの助数詞を与えることで、形を持つこととなり、可算名詞、具体的には、Type D となっている。名詞自体はカテゴリーラベルなので、複数形(s付加)にならない。あくまで名詞はカテゴリーラベルを言語化したものになる。しかし Type E の用法も若干ある。同じ容器に入っているのが身近な場合、直接数詞が付き、複数形になったり、単数として数える。また容器(助数詞)がなくとも、境界線をとまなうものとして認識し直すことで、Type E へと推移する。

(53) *three coffees, three waters, two beers, many wines, some hairs, a silence, a success, a virtue, etc.*

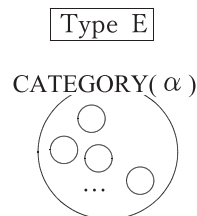
なお成員が前景化され、数えることができるため、単数の場合は、動詞は単数呼応、複数の場

合は、動詞は複数呼応となる。

- (54) a. There are two people who are linguistics professors.
b. A bottle of wine is offered to you as a welcome gift upon arrival.

3.5 Type E

スキーマ(55)の Type E は、可算名詞で一番見られるタイプになる。(55) カテゴリーラベルと成員が同じ名称を持ち、成員の名称が言語化される。すべて成員を数えることになる。通例普通名詞や集合名詞が Type E になるが、すべての集合名詞がここに入るわけではない。まず普通名詞は同一の種類で個体成員を表す名詞になる。具体的には(56)のようなものがある。



- (56) book, boy, cat, chair, desk, student, teacher, etc.

これらは数詞を直接名詞につけ、数えることができる((57))。また(58)のように these/those 類、many も付加できる。個体成員が背景化されておらず、はっきりと認識されるからである。

- (57) They invited three teachers on the day and held a workshop on online schooling programs.

- (58) a. Will you carry these books back to the shelf?

- b. There were many cats eating lunch from visitors.

動詞の呼応は、名詞の数による。成員は1つのこともあれば、複数あることもあるからである。1つであれば、動詞は単数呼応、複数であれば動詞は複数呼応となる。

次に構成員が定まっている、いわば仕切りのある集合体は、この Type E になる。(59)の様な例がある。これらは people などと違い、明確な境界を持つ((59)は久野・高見 2009: 82)。

- (59) team, family, committee, crew*³, staff, group, audience, people 「国民、民族」, etc.

これらでは動詞の呼応が、何を指しているかで、単数呼応になったり、複数呼応になることがある。名詞のタイプの違いによって、単数呼応と複数呼応の使い分けが決まる。

- (60) a. Her family is a large one. b. His family are all in good health.

これらも普通名詞と同様、数詞、many, these などの表現がそのまま付くことができる((61))。

- (61) a. The government has founded two committees to discuss these educational problems.

- b. Many teams have retired from the race. c. These teams are conducting the investigation.

4. 名詞のグループ分け

4.1 グループ分けの全体像

3節でタイプ分けをしたが、名詞は複数のタイプにまたがることも多い。またイギリス英語とアメリカ英語など地域差で、タイプが異なることもあるし、話し手に揺れがあり、個人差でタイプが異なることもある。それでも個々の名詞には、一定の方向性があり、グループ分けができると考える。それを以下示していく。まず最初に、先回りして、3節で述べたタイプ分けと、本節で述べるグループ分けを一覧表にしたものを(62)に示す。

(62)の上から順に見ていく。まずタイプと対応するスキーマは前述したように、全部で5種類ある。ただ Type E だけは、単数と複数にさらに細分している。5つのタイプは、円環をなし、5つが連続した形になる((14))。両者は両端に位置するのではなく、連続したつながりの中にある。

次に言語化されるのが、カテゴリーラベルと成員のどちらかになる。Type A~D まではすべ

てカテゴリーラベルが言語化される。成員部分が背景化されるからである。一方 Type E だけは、成員が言語化される。Type E ではカテゴリーラベルと成員が同一名称だが、成員を数えるために、成員が言語化される。その下に、動詞の呼応の記述がある。(14)で示したが、Type A, B, E (単数)で単数呼応、Type C, D, E(複数)で複数呼応が基本となる。

次の共起表現では、タイプによって共起するものが異なる。Type A, B は単数扱いなので、much 類が付加する (much(+単数名詞, +複数s)と表記)。これには語源的に複数であるが、すでに単数扱いの news など含まれる。Type C, D, E(複数s)には these 類、many 類、Type D, E には数詞類が付加できる。ただし these 類、many 類には、名詞が複数形である必要がある。こうした段階性は、成員の前景化のプロセスの段階性と一致する。成員が前面に出れば出るほど、共起できる数的表現が増える。

その下は、グループ毎に現れるタイプが記されている。グループは全部で12個ある。英語に共通するものもあれば、イギリス英語、アメリカ英語など地域差で異なるもの、話し手の個人差によってゆれがあるものがある。以下、各グループを一つずつ、見ていくこととする。

(62)

タイプ	Type A	Type B	Type C	Type D	Type E
スキーマ	CATEGORY(α) 	CATEGORY(α) 	CATEGORY(α) 	CATEGORY(α) 	CATEGORY(α)
言語表現	カテゴリーラベル				成員
動詞呼応	単数呼応		複数呼応 (成員が単数の場合除く)		単数呼応
共起表現	much (+単数名詞, +複数s)		these/those/many (+複数s) ⇒		
				数詞 (+成員) ⇒	
	Type A	Type B	Type C	Type D	Type E
グループ	water グループ①	furniture グループ②		※water,furniture グループ①②	△ water (グループ①)
	普通の可算名詞 グループ④	the United States of America グループ③	Scissors グループ⑤	※Scissors グループ⑤	普通の可算名詞 グループ④
		economics, billiards グループ⑦	shoes グループ⑥	※shoes グループ⑥	shoe グループ⑥
	clothesなど一部 (グループ⑧)		clothes グループ⑧	※clothes グループ⑧	
	John, Japan グループ⑨	John, Japan グループ⑨		valuables グループ⑧'	John, Japan グループ⑨
	news, measles グループ⑩			※newsなど一部 グループ⑩	
		集合名詞 Family など グループ⑫		people, geese 複数普通名詞 グループ⑪	集合名詞 Family など グループ⑫

4.2 12のグループ

グループ①は、Type A を基本とする不可算名詞のグループになる(表では Type A に網掛け。以下網掛けで基本タイプを示す)。Type A, D, E とする可能性がある。Type D では、助数詞を

付加したり、境界線を認識することで形ができ、数えることが可能となる。このとき Type A から Type D へと推移する。他の語の助けを借りるので、表では※記号をつけている。なお数える時に、尺度や単位が用いられることもある。この場合 of は必須で、同じく Type D になる。

なお助数詞がなくても、three coffees, three waters など普通名詞と同じように数えたり、抽象名詞に境界線ができることで可算名詞になる場合には Type E となる。動詞の呼応は、タイプの推移に応じて変化する。数が少ないので、△をつけている。グループ①の例をあげる。

(63) water, gold, butter, beer, sugar, rice, salt, honesty, kindness, friendship, etc.

グループ②は、Type B を基本とする不可算名詞となる。Type B, D をとる可能性がある。Type D は、グループ①と同様に、助数詞を付加することで形ができ、数えられるようになっている。

(64) furniture, cutlery, machinery, crockery, money, jewelry, baggage, luggage, etc. (= (25))

グループ②は、グループ①と違い、容易に想像できる容器(助数詞)や境界線を見つけにくいので、Type E はない。動詞の呼応は、Type B では単数呼応、Type D では単数か複数かで変化する。

グループ③は、Type B のみとなる。成員が集まった集合体で、もっぱら固有名詞になるため、much などの修飾語がつくことはないし、数えることもできない。(65) (= (26)) のようなものがある。グループ③は、複数形になっているが、単一の集合体であることから、動詞は単数呼応となる。

(65) the United States of America, the Alps, the Hebrides, the Netherlands, the United Nations, etc.

グループ④は、Type E を中心とする、普通の可算名詞になる。(66) のようなものがある。

(66) book, boy, cat, chair, desk, student, teacher, etc. (= (56))

Type E では、単数、複数両方あり、単数であれば、動詞は単数呼応、複数であれば、動詞は複数呼応となる。このグループ④は、Type E に加え、Type A に変換され、不可算名詞となることがある。すなわち形がないと認識された場合である。

(67) a. Then add the slices of apple in the salad bowl. b. The pen is mightier than the sword.

(67a) では料理の材料、(67b) では the + 複数名詞で、性質・機能などを表している。どちらも形がないと見なされ、Type A となっている。料理の材料の場合、実際は形があるのだが、認識上ないと見なされ、Type A になる。Type A では、動詞は単数扱いとなる。

グループ⑤は、切り離すことができない対となるものからなる。そのため複数形となっている。

(68) pants, trousers, slacks, shorts, scissors, pliers, tongs, shears, binoculars, glasses, spectacles, etc.

基本は Type C であるが、助数詞を追加することで形ができ、Type D として数えることができる。ここでも他の語を追加することから、表では※がつけられている。グループ①②と同様に、Type D で数えるときは、名詞の数に応じて、動詞の呼応が決まる。

グループ⑥は、切り離すことができる対となるものからなる。グループ⑤と同様、Type C を基本とし、カテゴリーラベルが複数形になっている。また助数詞を付加することで、数えることができる。このとき Type D になる。(69) が具体例で、(70) が助数詞を付加したものになる。

(69) shoes, boots, slippers, sandals, socks, etc. (= (41))

(70) three pairs of shoes, a pair of boots, two pairs of slippers, a pair of sandals, etc.

ただグループ⑤と異なるのは、Type C, D に加え、Type E が可能なことにある。切り離すことができるため、切り離したものを単体で数えることが可能である。しかしこのとき、カテゴリーラベルと成員の名称が、複数形から、単数形と変化する。そのため、Type C, D とは別カテゴリーとなって、Type E になっている。動詞の呼応は Type C では、複数呼応だが、Type D, E では、その数に応じて、単数呼応になったり、複数呼応になったりする。

- (71) a. These shoes are not suitable for tennis. b. This pair of shoes is a size smaller.

グループ⑦は、学問やゲームの名前を表すもので、Type B のみになる。まず学問であるが、学問体系の1つを表しているので、数えることはない。そのため、Type D はない。

- (72) billiards, cards, checkers, darts, draughts, dominoes, fives, ninepins, skittles, tenpins, etc. (= (27))

- (73) acoustics, athletics, classics, economics, electronics, ethics, gymnastics, linguistics, mathematics, etc.

動詞は単数呼応となる。ただ(72)にあげられている学問名は、学問以外の意味を持つことがある。この場合は、動詞が複数呼応になることもある。同じ単語であっても、意味によって、所属するタイプが異なってくる。(74)は、学問名以外の意味となっている(例は、久野・高見 2009: 25)。

- (74) a. These statistics look fishy to me. b. Two distinct ethics are in conflict in this school.
c. The acoustics in this theater are excellent. d. As you can see these mathematics are "real" hard.

次にゲームの名前(73)であるが、これも学問名と同じく、Type B のみになる。動詞の呼応は、単数呼応になる。ゲームの名前では数えることはできないため、Type D はない。

グループ⑧は、clothes などの集合体を表し、Type C を基本とする。

- (75) clothes, goods, supplies, greens, sprits, belongings, furnishings, arms, etc.

これらも助数詞を付加し数えることができるので、Type D の用法がある。しかし valuables のグループは、数詞をそのまま付け、直接成員を数えることができる(cf. (48))。そこで助数詞を付加するものを※で表記し、直接数詞をとる valuables などは※をつけず、⑧の亜種とみなす(⑧' で表記)。なお clothes や oats など⑧の一部は、Type A をとることができる(cf. (38) (39))。これらは話し手で判断にゆれがある。動詞の呼応は、タイプと数に応じて変化する。

グループ⑨は、John や Japan などの固有名詞が属し、Type A を基本とする。しかし(76)のように Type B と解されることも、(77)のように Type E と解されることもある。(77)では固有名詞が普通名詞へと推移している。

- (76) a. Japan has a lot of beautiful mountains and rivers. b. Africa has a lot of nature.

- (77) a. All the Woods like sport. b. The Smiths are coming tonight. (安藤 2005: 391)

グループ⑩は、語源的には複数であったり、複数起源と思われるものであっても、もはやその意味合いがなくなったものになる。Type A が中心的な意味になる。

- (78) news, measles, hives, shingles, mumps, rabies, etc. (= (19))

グループ①②⑤⑥⑧と同様、助数詞を付加することにより、数えることが可能となるが、すべてではなく、news など一部にとどまる。Type D の場合、助数詞が付加されるので、表では※がつく。

Type A では、動詞は単数呼応、Type D では名詞の数に応じて、動詞は単数呼応・複数呼応が選択される。

グループ⑪は、複数普通名詞になる。数える時は、数詞を名詞の前につけて、その成員を数えることとなる((79)は(47)の採録)。タイプは、Type D のみになる。動詞の呼応は複数呼応となる。people は国民の意味では、Type E になる。

- (79) valuables, cattle, people, geese, cows, police, clergy, aristocracy, nobility, peasantry, etc.

グループ⑫は、集合名詞で、(80)に示すように、集合名詞になる。集合名詞であれば、数えるときは、成員ではなく、集合名詞自体を数えることとなる。Type E を基本とし、Type B に現れることもある。Type E の場合は、単数・複数に応じて、動詞の呼応は変化するが、Type B の場合は、単数呼応となる。

(80) team, family, committee, crew, staff, group, audience, crowd, people「国民、民族」, etc. (= (59))

Type Bでは集合体として見られるので、1つとなり動詞は単数呼応である。Type Eでは構成員を意識するかどうかで、単数呼応になったり複数呼応になったりすることもある。

5. まとめ

本稿は、単数と複数について考察し、カテゴリーによる分析を提示した。ここでは5種類のカテゴリータイプがあり、それらが円環をなし、連続していると述べた。そして名詞の種類によって、とるカテゴリータイプが異なるが、そこには一定の方向性があるとし、名詞をグループ分けした。グループによっては、複数タイプをとることもめずらしくなかった。名詞自身が持つ、特性によって生じるふるまいの違いからくるものであった。本稿では、紙幅の関係で、タイプの提示と、名詞のグループ分けを行ったが、残された事柄は今後の課題としたいと考えている。

注

- *1 抽象名詞を普通名詞化すると a/an, many は付加できても、数詞がつけられない。この場合、Type Eに完全になりきれしていない。
- *2 furniture や gear は数える時は、piece など助数詞にいれる必要があるが、1つだけ数えるときには、the only furniture, the only gear と表現することができる。これは furniture や gear が、単一物に焦点があたるときのみ、Type D が許容されることを意味している (cf. 久野・高見 2009: 80-81)。
- *3 police と同様、crew はイギリス英語とアメリカ英語で、ふるまいがかなり異なる (cf. 久野・高見 2009: 99-102)。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社。
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S. and Finegan, E. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman, Harlow.
- Depraetere, I. and Langford, C. (2019) *Advanced English Grammar: A Linguistic Approach*. Bloomsbury Publishing, London.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 久野暉・高見健一 (2009) 『謎解きの英文法 - 単数か複数か -』 くろしお出版。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Swan, M. (2017) *Practical English Usage, Fourth Edition*. Oxford University Press., Oxford.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

名詞における単数と複数

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Singular and Plural Nouns in English

Takafumi OGATA

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第33号
2022年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 33
2022